





環海異聞卷之九



イルコーツカハ 伊爾歌都哈  
ハツツク 發軫  
バト 伯多  
ブル 球蒲  
ル 爾  
ツ 孤  
道中記

イルコーツカノ地ハ洋留ス多ク己ハ八年ハ星  
雲ヲ經テ以テ時留駐スルコトイハ目アケルカ  
ク空ニ年月ヲ定メ給フコトイハ目アケルカ  
享和三年 庚子二月始ト是レテ 所年寄ヨリ日本

漂流人者、西用のもの、此方、西も、新所へお移し  
出さるる命なりぬ、皆々何事ぞも、無く、福も  
給ふ人お移し、出され、奉行中、後、此方、  
西用のもの、此方、西も、帝都ニヤコに、可お召、登る、王命の  
飛、持、級、人、為、其、世、ま、ま、其、仕、也、大、の、人、は、使、以  
可、お、召、る、也、各、畏、り、て、已、れ、ら、飛、お、引、と、ま  
ま、く、の、用、意、調、ひ、り、は、度、ニ、コ、ラ、イ、新、所、も、付  
添、系、交、内、新、所、り、お、れ、こ、う、御、出、お、出、お、り、て

新、所、も、あり、幸、の、付、中、を、り、し、ゴ、ロ、ジ、ニ、チ、中、を、  
法、せ、し、中、の、交、帝、都、り、り、は、交、の、日、本、漂、流、人  
を、ら、ま、為、召、さ、る、御、中、其、り、し、り、を、れ、新、所、に、  
も、と、ま、ま、此、所、あり、ま、ま、ま、ま、の、沙、汰、あり、是、も、ま、ま、  
い、り、く、内、信、信、何、れ、し、御、を、所、年、考、内、意、せ、し、  
は、事、目、也、人、より、我、く、是、為、通、毎、新、所、御、所、  
御、所、より、交、し、為、預、り、て、御、し、中、せ、し、振、子、を、  
新、所、の、此、方、の、考、方、に、ま、ま、御、所、御、所、に、何、れ、也

承諾し各戸合一統小付形指出せし私書も  
ウケコシ  
新編もと遊れしつゝ美端不致合もつゝ  
以情願を以同人所係は御身より交与され  
意を申立し小付事、以し知も無くを王府ミヤウラ  
目下通河も尽く唯是を申すなり乃り、是を何れ  
も形の取をのりし、自如形は流中、と申すも  
なりて新編も附録せしは振子を、仍各年来  
懇小世話文し、人々も交れと昔事旅装調

以て七日と先くは化と昔是す

後、乃羅紗の長彼系後引番等十三人、以之  
日内、之申す、都府、何事も、自便利あり、不  
用、乃物、は地、を、奉拂、以、費用、乃、物、を、り、お、て  
手、種、く、し、その、年、あり、し、所、各、を、言、ふ、ま、う、す  
儀、平、は、財、を、キ、セ、ロ、フ、方、お、ま、り、て、家、事、の、子  
傳、も、志、し、り、し、く、永、く、曾、折、し、て、若、子、乃、銀、子  
な、し、錢、デムケ

甲斐守の役人某者人

名は何れカレキサンダラ何れいひり  
是中双鷲の團陣附る皮袋を携

然て内ふは甲斐守の役人をたづねり  
あるやとて駈けよと云ふ事あり

漂流人は人といふ物なりと

紅世のポホローチクといふ官人のよき公用を

合して急進ふ事せしめりといふ物なりと

いふ事なりといふ物なりと

といひかゝる彼土俗事とする所の言の葉の

氣象男剛果敢とやいふ事

介抱三人の者ニコライ新長門守  
途より抱三人の者

船所 左太史

水之 銀之序

日 氏之雨

日 辰之物

日 清之物

日 八之序



車の上人乃宗乃不乃圍に皮張り走る物あり  
前より入らりし皮に赤子前へ垂れ下る振ふ  
しきものあり雨の序にこれとこれと  
内い二人向ひあつて飛ぶ車より前より振ふ  
なり馬より出る馬の口を人らより振ふ  
しき鞭の先より皮紐を施しふる物を振く  
なりし馬をさすむ先なるの級人なり  
ふるふし鈴をつまみなりは鈴の音先きの

驛へつゆふた公用の結るなりしと  
馬を引る事給受けてありしと  
大なるいは皮袋の結るなりしと  
結ふふけ振るゆへに大なるなりし  
と振る振るなりしと  
彼玉系車の巻源客の結るなりしと

はらふなりしと  
昨日ある人なりしと  
大光の巻同せしと



此等者も亦おもしろ始て其形状の畧を略  
と云ふ驛迄用る物と都府まで用るものとの  
精粗の異なるのうゝて大抵お月し度中  
用る物「コピツカ」と呼ばれ都下まで用る  
物「コレイト」と名く乗車に利得たある  
輪をより其重なる車前の方におも輪  
をとりて転走のうゝ率をささくはら輪の  
筒便の利あるを信なり前の輪の形もこ

後におも輪おしして大サ我方の大ハ車より  
稍大あり前ある小輪、後輪の寸分程  
ありは小輪お付きて上の方おけり出て  
より其門くニツ一ツおけき上へ向ふなり  
たれ故に其輪下へは尾をうお「海の大輪  
と同等ふある也おげくの上へ「撞木形  
のうぐもありて是をさある馬の胸のま  
施すに其輪を撞木をたす皮紐を附

此其紐を以て返して車の上板のまゝに  
其角の紐の留む紐を其板の生中と  
たたくふふ紐を付て其先ある馬の  
極し又其紐を引返して其馬の  
たつひしふ紐の紐を始りやし先する  
何走せしむの如くふあす之是を御する  
若し車の上の前の腰を紐おつけ  
其足下の前の紐の板をとりかへて

あはれし其紐をみ事飛かして其  
鞍足の馬の尻の事なる手綱と一ふ  
もちあがりて扱ふなりお人のたつひし  
圓の紐は皮張あり其圓の高き車  
の上板より其頂を立ちあがり人のとく  
程あり意に其紐は二つ但二つの方  
小あり共し硝子板をてる其屋上の  
前より垂れ下りし皮はなり風雨の事

あはれと下はよめれあはれと人の命はた  
たみあり戸は開くは戸を開け内は  
仕無ありて其開くともみは踏<sup>フミタシ</sup>版とある  
べき鋼板出つ吊是との月りて内へ入る  
又團の糸海<sup>ウミ</sup>の方へ出流りあるよあり  
従者<sup>ツグ</sup>こられお登り四本の紐をよめ無  
下り物ともお持ちて立居るは騎馬の人  
生<sup>ナマ</sup>はふらふらするの胸の前へ鉄を下く

先<sup>マ</sup>も<sup>シ</sup>い<sup>ハ</sup>し<sup>テ</sup>御<sup>ミ</sup>者<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>知<sup>ル</sup>は<sup>シ</sup>る<sup>ハ</sup>存<sup>ゾ</sup>なり<sup>ト</sup>い<sup>ハ</sup>す  
その中<sup>ナカ</sup>の<sup>チ</sup>序<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>い<sup>ハ</sup>す<sup>ハ</sup>地<sup>ノ</sup>是<sup>レ</sup>なり<sup>ト</sup>車<sup>ノ</sup>の<sup>前</sup>の<sup>チ</sup>  
様<sup>ノ</sup>の<sup>う</sup>で<sup>ニ</sup>あ<sup>ら</sup>ふ<sup>ハ</sup>下<sup>ノ</sup>方<sup>ニ</sup>なり<sup>ト</sup>又<sup>ハ</sup>左<sup>ノ</sup>右<sup>ノ</sup>入<sup>レ</sup>の<sup>チ</sup>あ  
み<sup>ノ</sup>綱<sup>ノ</sup>の<sup>板</sup>をつ<sup>け</sup>て<sup>車</sup>雨<sup>ノ</sup>の<sup>時</sup>は<sup>あ</sup>れ<sup>を</sup>た<sup>た</sup>  
翼<sup>ツバサ</sup>乃<sup>ハ</sup>やく<sup>ト</sup>下<sup>ノ</sup>方<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>なり<sup>ト</sup>車<sup>ノ</sup>より<sup>も</sup>を<sup>れ</sup>ん<sup>ト</sup>る  
浜<sup>ノ</sup>ち<sup>を</sup>訪<sup>フ</sup>く<sup>ハ</sup>為<sup>ス</sup>す

は<sup>信</sup>都<sup>ノ</sup>府<sup>ノ</sup>を<sup>し</sup>り<sup>て</sup>車<sup>ノ</sup>の<sup>根</sup>を<sup>し</sup>て<sup>駈</sup>送<sup>ル</sup>の  
車<sup>も</sup>是<sup>レ</sup>なり<sup>ト</sup>い<sup>ハ</sup>す<sup>ハ</sup>麻<sup>ノ</sup>呂<sup>ノ</sup>の<sup>車</sup>なり<sup>ト</sup>い<sup>ハ</sup>す

又前の車輪と一つやして小く走らざる直  
行しゆる車は往々右往々左様子のく  
さんする付はくの下り旋回するや  
自らとあす振ふまよしゆるおしる車  
彼玉の車のかくのめく前存大小三輪  
みしゆる前のも輪の且輪ふよめてた  
うたは様く且すしよき自しよき内  
たすゆる人の車もも前しゆる故は輪

指りしよすむたれ人カと後きのおし  
て簡便の利ありあて西洋諸國の車  
三輪と名ゆ唯は車作しよふよめて少  
しつものちくある故なり

車馬圖



同月八日 六十里程 彼里數 下月し 系る者 駝場也

けあして馬替代ゆらぬ不覚 同小も駝必 了り不覚 け不羅

紗を織り出しけあの子ふんはうい

八日の日何とすあの驛うた更法我病新甘山

これハ車馬群の亦速急有車ハ碎ハ振子也

ナ道より路次平坦<sup>マイラ</sup>申て古太山ハ是れも高

山ハ是ハ樹木ハ松と檜の本をまて 形状如産の 於不存す

同九日迄 或百里程系と。是ハ古太山更法我

与人病体不者務様乃中女並河也後人ハ新居療  
善治しあハ紗ハ金使元次等追指送是ハ病状ハ

追ハ乞ハハのそ中ハハハ便とハ等及ハ人

痛ハ不及ハ方イルコーツカハ送ハ病ハ也

道中多クハ屋敷車と去ハセ食物の蒸餅ハ車の上

して行ハ使用の亦ハ下り不ハ及ハ急ハハ路程ハ容

子ハあハ幾日ハ中ハ地ハ中ハもあハ是ハハ車ハ不

仕ハ出ハすハ千里ハはハハハハ

カラスナヤリツケ トシノ所ノ名

はる鎮守ダイケンと云ハ所ハ所添ノ役人何々也

合ノ所モ四折ト云ハ折々ハ所モ以テ

中山人家ハ餘程四折但イルゴーツカ終ニモ

山折ノ駐代友五ノ地ガクモジヨ郷學ヒヤウシヤと病院

必ず建て置居子ナリ川あり名ハ是ノ牛肉

魚類ノ市店モ多ク又ハ牛肉ハはる

イルゴーツカモモキヤト云ハハ は地の所役  
アキヤ

一山立以來山々ノ外ハ雪ハ冬ハ止ムシハ付モ不

至リ道中ナシテ雪あり川々ノ岸ハ氷ハ

津ホ不ハハ道程次第北ハ向ハ糸ノ折モ

宿モイルゴーツカヨリハ別テ巖モハ

一層折ル事モ走レセ百ニ千里又ハ百四十里

餘業ト云ハ

一は道ヨリ粉ヲ挽キ肉車メカハ高カモ仕

業ハ道中ト云ハ

風扇之圖  
カサクルマ

此物の圖奇器  
圖説小丸扇  
名づく





付意より十日程ゆき、雪を踏み跡の跡に往く事なき  
程ふ雪の中

一場も走らざる不定の四月の  
暮に、後程一七〇と云ふ所の百日後に  
その月もたゞ東方あつたなり日出  
日輪、月ハ分程ふ程なき

先年漂着の島と出船しサンパイヤを  
より、雪し氷海へのり、みおのり海

上ふじりしは、何れも是の

梅も北を止白里地方の夏月の候すて如  
は、何れも是の地志を、是のりは方位の度教  
は、何れも是の地志かある、は申再考、

又此より千五六百里程行す

ドンスケ 一と云ふ、是れ造り、是れと云ふ、

一タタリヤの高客、是れオロミア人  
一難居の根子也 是地の得候ふ程

一 鞆タタ面鞆ル人、眉黒く顔白く、天窓、髻ホヱ頭ヅ

なまり帽子、形カタ、 女此メコノの冠カザリ

自ら力量ありといふ

扱アツよりイルコウカ、より、二千里程ありといふ

平カテンボルカ、とて所トコロ、

一 家造りドンスケ同様、数、石をなすは

亦また、山々、遠く、

一 は所トコロ、織オリと、産ウツする、亦また、結ムス綫イを、

炭と山の如く、積ツえ、運ウを、車の上より、  
きり、それ、

ペリマ、と、云イふ、は、所トコロ、

斗ツ百里程ありといふ

一人、家造り、石造り、あり、町家も、

等ヒトより、一倍も、

地チ、魚類、多オホく、

シヤテレナ、扱アツも、  
較ヒの、等ヒト、

此地の得況ふふ録す

一銀三席一肘子大熱出て患身夥々小瘡を  
惹し面目まで行甚く麻痺乃等し病  
體也此れふより呼吸促迫強く旅以程  
付は所は為め道は平愈以穿都下まで  
送り存け此く積り不致しあり

之は船中死生の程をよりかき皆都府  
出立のその中もあなむお分りすイルウツカ出立

のその中彼地麻痺流行せし、皆船中  
も麻痺ありてまきし皆しあり  
けあより何里行きしや不記

ガザニ  
と中おらるる

所亦あり石造りありペリマ因根甚く繁葉  
の城下なり所の入口には方見分ける等し  
橋門ありを代官おるなり

此地名タリアの意城の北城の前方大河を

とて里中一りの城の石垣高く築きて  
入るあけてみる程好なり其の上小堀圍有甚の堅  
固なりとて壯麗なり見ゆ城内の寺も多しなり  
皮革類は亦名産なり魚も西無類第一なり  
を優も物なりとて小麦類雜穀も宜しく出賃も  
人おしとて是を圃小種附せる麦とて人亦皆  
のびすはきふる物とては日中の如く長く生  
す我邦と同き小麦とはきふて初めたり

車乃拾破せしを以てして往をせし有る  
道なるより但お中乃出入ゆ一町内乃振子も  
明細ありえとてなり

梅がガザレとてカサレとて支那も加山  
音譯せり譯伝ありはなり

加山より千里程もとてなり

ムスクワの大都府は四月中迄は是にてなり  
公候ありはなりとてなり

此地德國の都府なり國王の近親の之位の  
人城代も居る町に數百町街道の廣き  
車と云つ程並んで通用の車程なり程程  
小治交するなり亦、（下）を交するなり亦、  
悉く石造り華麗なり様々あり亦、  
至り結構也間毎にあり大なるも其造巧  
堅固なり下より上へ塗りあけり亦、  
瀬戸の焼物の如く表面に漆を打の新餅と  
イロトリモヨウ

なせり是ふ學し亦、肉の根子、  
亦と亦せり食料は蒸餅、牛、豚、雞肉の類  
亦、大抵、  
一城市の万見物なり一、  
見、  
新都ペトルブルクより、  
處

梅子ベトルブルクを我里教部里程ありし  
と安ゆれは従ふれ、四里四方もさし  
これ得あるもの、仔細あり

一所の入り口は狭の方、高きあり、江戸の岩窟  
山程の如く四面眺望あり、此所は  
波及び無類の大筒を飛べ、石壁を  
築上げて、上は尾屋四方あり、  
下地は、ある石は生かす、之は、  
擬並てあり

長サ三方、程筒の縁縁、長さ四尺五寸位あり  
カウカチ 銅あり、鍵あり、蓋あり、前海に自  
中ふ廻轉する、振ふ仕無きもの、石の大き  
も、さうな、蓋あり、筒あり、今も、  
物あり、怪しむ、大造り物なり

梅子走を、張子銃に、今作向ふ、  
一、二、三、と、延多、指方、少く、つ、  
二、三、斗、小、足、一、二、三、  
但、飾り物、あり

焰硝と川に穴を穿てて

又按職方外記莫斯科未亞條曰大

銃長三丈七尺一發用藥二石可容

二人入内掃除云々

はふより十四五名も隔りて進まずあつて

巨鐘ありて土穴の内に入銃の指板オホガネ並

たる紐頸元と下下のフトちきつて二人程上

へきつて厚さサ二下へは履物取らぬと云き指

多しは此穴の内圍下底より石垣を築き

つぐ又此穴の上の趣より四五百四方の五垣

ありは此銃何年以前何の爲に築かざりし

り等と云ふ爲めすか古大筒大銃の所あり

六七人々番人附居あり

捕ら光を更へて此大筒と目ある大銃は

昔に釣魚の焼る屋の中あり銃は大地に

喰入る所ありと云ふは石垣あり

一月唐一ありては不詳し四州に大  
ありては不詳し一ありては不詳し  
四州に大目とて其書目不仕或は五万書あり  
ありては小山の如くおるは是に二十  
二ヶ所の名物とて及に彼を其書目と  
目下の四州ある目ありては四州目と  
ブートとありては 大群の詳記ありては

は大群のそのを不詳し少書ありては階作の樓

唐一あり

按ふはれ唐書ありては光を史に記すありては申  
按ふムスクワハ世に所得ムスコビヤなり彼を  
自稱してムスクワ又モスコウといふ北極出  
地五十五度半ふありては地を唐土ありては  
莫斯哥末亜ト音譯せり中はムスクワ都  
府の事を都城本府の名を以て全列の  
ありてはありては今種惠列の名はオロイア



たり近來我邦ありオロシヤといふ是あり  
漢人の魯西亞、俄羅斯、鄂羅斯、等の音  
譯教名ありムスクワとき彼曆教一千三百  
年我正安二年の次より「ウラシム」といふ  
地よりナラフ都を遷せりは以て王國ありし  
ペトルといふ王の代より帝爵の國とあり  
とて八十餘年來今よりペトルブルカといふ地  
に新都を建てて王居とす、とて舊都あり

貴族を城代あり、並に芝をまゝ居る女  
帝は年々新都を都府とす、居居ては  
今、新都ふの、住居の根子なり簡便の  
要地あり、故に精詳の譯記をふ、譯す  
漢人等、は都ふ、一品都府の、方なり、見す  
せ、る、所、なり、の、て、い、ふ、也、し

は都より新都を七、る、里、程、の、下、都、下、の、如、く、急、  
傾、石、あり、生、透、る、ふ、た、き、土、を、以、て、つ、き、星、の、平、坦、







より呼登せしむる等も皆是人の居る所  
なりしと云ふよりて旅宿ともは館内か  
定め帰帆の事と云洋館中此人の名  
扱て移る厚名乃世征と云ふなり

殿にやより所家の並みてある所  
四方あり之堂門なり第一の大門なり第二の  
門南の極小鉄炮と持ちある番兵式人を置く  
第一の堂の門に石と云ふは阿彌寺の唐門の如く

入り口を丸くし扉を板なりある雑カのみ  
おと肩よりお越の馬けある者番と云ふは人  
印上へ出る者の名次と云ふ也  
同の晩まで舟に連糸の段人指添にれもガラフの  
前へ石出する大の門を經て先ッ堂上へ升るふ  
順に階とのぼり之階の上へある毎階四面硝子  
障子なり

かくのこゝに四才硝子板に示す人形

大々くく福をなす追々王宮へ出さる  
と同一大小の遠あるをなす

其席上四壁あり硝子の窓硝子張の画額あり  
獣草木人物等の額数々あり  
其不殘板ありてあり仕切ありてあり  
我邦の如く是を以て以上を叙する所あり  
皆々在るに交りてあり指圖ありしを席に出  
附座後人等ありて引接しうらガラフ正面あり

出ッ其伯母ありしり人も偶ふ其側に出ッ陪從  
の者四五人其在たふ候すがラフ何れも一合新を  
て且間をわく各日中一時度度又は此上あり  
形もきや何れも午時等あり可致い候々の人持  
次等ありて扱遊するも當帝の思存也とあり  
同様の月はまた儀事たる年太十席前後席已あり  
六人より老老の何年中も一毎朝仕度らるるお者  
外四人の老老のガラフ再び下されしに可致い候  
りあり候す

事なり我帝王外玉の人を至て珍愛と思  
百物を憐むもかくもあまをばるる者何れも  
心まふ及そはあ氣統し指さしと鮎ふや  
これなり

は時ニコライ 新義も柔上しむれは交  
同部しと生るものあり云上不流加列席  
せきもしう階添の役人生活等とガラスに  
中出しは根子あり皆々月通り流れて流る

新義不流を呼出委細のりもと最る所を  
一カラフの服飾上ふ多地 色羅紗の  
羽織の等物と見るなり金銀のさしなり  
と附もるもの也は月ふある 表衣さき  
留す は目見しと帝王の  
は根し日根ふとあり  
一伯母君をりといふ人出られし日本人身  
物のもあと思えを装束追々目見しと  
皇后の正服と同し根ふ是なり

ウハキ

一は交々付ひ登りし役人往來多滞日本  
漂流人百具し始末よるきしとて其節  
より金と賜り獲牙せしけり

一滞留中乃短是と月以ざる結構なる調味  
なり毎日之ヲ度食つ通りの胡菜乃子と  
いふ物ありし。居候料理一人食九通り  
移つ所り代へ出す食器数種とす。此  
上子並一列宿給仕人附、縁手あり料理

人車りて順ふ仕出す。振子なり

蒸餅ハシふ添シる蒸シる塩水シふ牛肉筋角の  
類ふ米と少し入る者なるもの也。此解  
肉野羊ギ並魚類種々有り

大善シ五升あり米を搥シ入る始  
り之漂居以存はあり始り米粒を食せり

料理大抵太のめしつゝ是す海一  
日ふ式度つゝ食時の時出す皆麦ハキサケ醗酒



なれは風味至て巨一を葡萄海に出たり

ガラフ乃宅逗留中見守る新事

一館内人数七百人数あり 赤地チヤコウシの人を在

させ重なりとてゆ表通りの大抵男子斗

る申婦人のまれなり

一赤地在所より野麦を運送する事あり

一虎トラフ式シキの紫色白色卵タマコイロ黄色の石を厚

四寸より大サき重き畧タカ程に製しる事

警机の如きものあり 肝カニ高く木を作り

吹受乃けふ飛トビくトビ此上あり書カキする

時月ゆ右の名ナハハくクといふ

は石長大ありの寺院乃て木を造る物

も数あり外ソトの物も造る物

一今イマ燭管ソクカン頭カビを製し用る事あり

一様文字の書籍も野麦守秘ノヒ並ナラびあり

あり

一カラフ出羽の岸、車馬も多かる六丁も也  
先ずる武正、靴並有り従者多かる先づ供の  
んあまし車は後、供部人附くを有り  
其解糸も有持しものいし

一敏内家宅の中、羊花と羊ふ、不ま生  
中花壇あり種々の植あり、其上あり  
園硝子板也園丁あり時々温暖冷湿の  
加減とありし花と開を、空を結る、此を

根子なりは、申五月は、是にて梅桃すま  
桃乃空を結ひ、もるといなり、は、ふふありて  
較年ありて、始て、花實とあり、土地  
寒國ゆ、めは、空の、月、羊、さ、は、花、実、有  
とり、事、を、記、す、也

一王上、目見、の、岸、日本、彼、兵、用、す、ま、し  
の、お、何、ま、も、是、古、不、持、不、仕、也、とい、ひ、れ、は、  
ア、スタ、ノ、コレ、ダ、と、い、ふ、後、ふ、く、や、れ、は、り、は、お

ては控人前報のやまはけす法と可なり  
其後又は立出車ありて又は小形き  
交は段下ふやれより遠道子の長おき  
羽織帯等なり

一皆出立の時、毎交車馬おたるせきなり  
四人ありて輪<sup>イロト</sup>飾り花<sup>ミゴトケツウラ</sup>  
小作もあつて車あり四丈あるて牽かす車の  
上<sup>カネ</sup>の鐵と返し皮とあり車すこり

ゆらゆらする振ふあつたれ車轉動して  
ひこぬ振ふ走つたものこ四方に硝子板  
外<sup>ソト</sup>のへ透く振ふし其内<sup>シトネ</sup>の筒と走す  
是の<sup>ミマアツカイ</sup>長及織物ありて其轆の上お腰  
ちれお御着腰とて其鞆の如き物とあり  
馬とてすむ車の後<sup>シトネ</sup>に供立人なり

一カラスの別は是物お形きしてあり其  
るた多し入事あるを新なりありて其

又馴らる物に孔雀をも畜し並に鹿も飼育す  
せし奇草実も教多ありは亦帝王の遊  
ミナレヌクサ カハツタキ  
苑の西ありカナスダといふ濠も尺ゆり  
トコロ  
所あり

一國王の軍船千五百人乗るなりといふものと  
親ヒタシくともり長り六十四上尋程ありたまた表  
の方とも石大舟の定あり三階作りあり  
櫓第一階の上あり舟底に鉄又石

とほむされ船をオモくするものなりと  
は上より兵糧並に數十の水桶とるもの  
はゆりシナる船と云ふと軍兵の居る所と  
あり彼玉の船作り甜瓜カンクワと削りたる等  
ものなり

は軍船の事弘強う能閑するものあり雑  
事シは載するもの、舟乗る能事せり也  
此時他の雜信も終れ推定す違あり

今古れと見れ、一事古娘のりと解せらる  
於し思ふ事難事篇不出せり、新其國を  
帰航の船中を彼人曰、修等院ふ乙  
ある所の新造の船の國をりして書き出  
し、は二位七百人ありし、五百人あり  
等の遠くを、何れ、再問の上を、  
推し決し、姑く、其位と擧めて  
他のの技と結ん、

一此艦<sup>ヤシキ</sup>中を人、い、今より七十年前此  
都の是、此國と開き、太祖の  
百年忌、大なる事、

按、魯西無記、得、伯多<sup>ペトル</sup>球<sup>ル</sup>第一世乃  
祖彼一千六百七十二年、我寛文十二年誕生、一子  
七百廿五年二月殞、享年六拾、四年、之申、此、八十  
十年、之、申、八十  
年、之、申、百年忌、

彼一千七百零五年 我寛永二年 あつて祭

責をこ 一百年あり 源人傳受す方あり

他の祭事先代の誕辰あとの祭事あり

あつてや一躰年忘と祭方といふ事あり

趣あり申

又其國誌に我享保十年 曆教一千七百二十五年

ふありては都を新に造 建せりと申

それより十年を八十年ふ及びたり或は此

偶教を得よとの祀事ありとありしや

環海異聞卷之九

Handwritten text in a vertical column on the right page, likely bleed-through from the reverse side.

Handwritten text in a vertical column on the right page, likely bleed-through from the reverse side.

Small handwritten mark or characters on the left page.

